

大学発マイクロ波論文特集の発行にあたって



大学発マイクロ波論文特集編集委員会

委員長 古神 義則

「マイクロ波」という言葉は、今から70年位前、電磁波が広く民生用技術として展開されようとする、その創生の時代に、一つの象徴的なワードとして使われ始めたそうである。現在社会においても、「マイクロ波技術」あるいは「マイクロ波産業」というキーワードは広く認知され、社会における「マイクロ波」が果たすべき役割はますます増大している。今後も、当該分野の技術者育成は優先的課題であると言える。

「大学発マイクロ波論文特集」が、和文誌Cの2004年12月号として初めて発行されてから、今回で14回目を迎えるが、本特集の趣旨はまさしく大学の若手教員、学生研究者の啓発・育成なので、今後もその役割は大きいはずである。ところが近年、本特集の掲載論文数は減少の一途をたどり、今回は招待論文1編、一般論文2編、ショートノート2編という結果となった。編集委員会として論文投稿を促進できなかった当方の責任は重く、本企画の継続に御尽力頂いてきた先輩諸氏に顔向けできない思いである。IF至上の風潮が強まる中、大学研究者の和文誌離れは深刻であるが、和文誌だからこそできることも残されているように思う。いずれにしても「大学発マイクロ波論文特集」が、従来どおりの貢献を続けていくために、少々工夫を施すべき時期に来ているように感じる。

しかしながら、今回の本特集に掲載された5つの論文は、いずれも読み応えがあり内容的に優れたものであると思う。今年度からマイクロ波研究専門委員会委

員長になられた村口正弘先生には、ソフトウェア無線実現のキー技術と期待されるRF直交アンダーサンプリング技術をととても丁寧に解説頂いた。その他、宇宙用整流回路のための半導体技術、古典的マイクロ波フィルタ回路設計の限界を打ち破る設計理論の進展、医療応用にも期待がもてる液体の誘電率測定技術、屋内無線LAN通信環境改善技術に関する各投稿論文からは、日本のマイクロ波技術が広く展開し、深く掘り下げられていると感じ取ることができる。

最後になったが、大学の若手教員、学生研究者の啓発・育成という趣旨を念頭に置き、かつ論文誌としての質を維持すべく厳に公正な査読作業・編集作業に御尽力頂いた、査読委員、編集委員、他関係各位に、深く感謝する。また、本特集に投稿頂いた全ての皆様の今後の研究活動が、更に隆なるものになりますよう、祈念する。

平成29年11月13日web公開

古神 義則 (正員) 昭和63埼玉大・工・電気卒。平2同大学院修士課程了。博士(学術)。平5同博士後期課程了。同年宇都宮大・工・電気電子工学科助手。平13同助教、平20同大学院工学研究科准教授。平24同教授。マイクロ波・ミリ波帯の誘電体共振器フィルタ、誘電率計測に関する研究に従事。電気学会、IEEE各会員。本会エレクトロニクスソサイエティの中では現在、マイクロ波研究専門委員会副委員長、APMC国内委員会委員長を務める。

大学発マイクロ波論文特集編集委員会

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 委員 | 長 | 古 | 神 | 義 | 則 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 幹 | 事 | 武 | 井 | | 健 | ・ | 清 | 水 | 隆 | 志 | | | | | | | | | | |
| 委 | 員 | 山 | 之内 | 慎 | 吾 | ・ | 平 | 野 | 拓 | 一 | ・ | 日 | 高 | 青 | 路 | ・ | 大 | 平 | 昌 | 敬 |
| | | 亀 | 井 | 利 | 久 | ・ | 河 | 口 | 民 | 雄 | ・ | 君 | 島 | 正 | 幸 | ・ | 佐 | 藤 | | 優 |
| | | 須 | 賀 | 良 | 介 | ・ | 道 | 山 | 哲 | 幸 | ・ | 堤 | | 恒 | 次 | | | | | |